

珠洲焼

珠洲焼は平安時代の末期から室町時代の終わり（12世紀後半から15世紀の終わり）にかけて、珠洲市および隣接する能登町の一部で作られていた、中世の日本海文化を代表するやきものです。

古墳時代から平安時代に焼かれた須恵器の技法を受け継いで、害窯を用い還元焰焼成されたため、出来上がった珠洲焼は灰黒色となっています。

生産を始めるにあたっては、瀬戸内地方の東播系窯や東海地方の常滑窯などの影響を受けたと考えられています。海上交通によって、13世紀（鎌倉時代）には越前から東北地方の日本海側まで広く流通しました。その後、14世紀（室町時代）には北海道南部まで運ばれ、日本列島の約4分の1を商圏とするほど栄えましたが、15世紀後半には急速に衰え、まもなく廃絶しました。

珠洲焼は、貯蔵に使われた甕・壺と調理に使われた鉢が多くを占めますが、ほかに経筒や仏・神像といった、宗教儀礼で使うものもあり、その種類の多さも特徴のひとつです。

現在、珠洲焼を焼いた窯跡は、40基ほどが見つかっています。

■ご案内とお願い■

●開館時間

午前9時～午後5時まで

●休館日

年末年始（12月29日から1月3日）のほかに、展示替や資料整理のため臨時に休館する場合があります。

●入館料

一般 310円（団体 210円）小・中・高生 150円（団体 100円）
※団体は20名以上

●お願い

- ・展示品には触れないでください。
- ・展示室に食べ物や飲み物を持ち込まないでください。
- ・展示室内はビデオ撮影禁止です。
- ・館内は禁煙です。

珠洲復元古窯



復元窯の概要

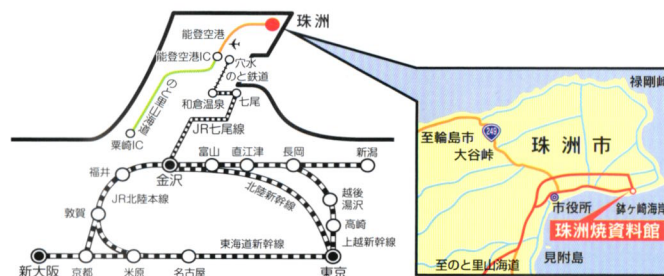
この窯は、13世紀前半（鎌倉時代前半）に操業していた寺家クロバタケ3号窯跡（国史跡）をモデルに復元したものです。窯の製作方法も、遺構の痕跡をもとに当時の材料・工法を復元しています。当時、一般的に使われた害窯（あながま）という種類の窯で、仕切りのない単純な構造でした。他の産地の害窯の多くは、斜面を掘り込んで造る地下式か半地下式でしたが、珠洲窯は窯体が露出する地上式でした。この形式は、製作に労力がかかり窯の強度も劣りますが、地中に奪われる熱が少なく、緩い傾斜との相乗効果で、燃料の消費が少なかったとみられます。

◇全長9.8m

◇全幅3.2m（焼成室最大幅2.0m）

◇平均傾斜角度10度

（珠洲焼資料館敷地内に復元窯が完成しました。（平成23年3月）
どなたでも自由に観覧することができます（無料）。窯内部は堅く焼締まり、鋭利な突起が多数あります。危険ですので、窯内に入らないようお願いします。）



〒927-1204
珠洲市立 珠洲焼資料館 石川県珠洲市蛸島町1-2-563
☎0768-82-6200 ☎0768-82-6045
<http://www.city.suzu.ishikawa.jp/suzuyaki>

- 能登空港から車で40分
- 路線バス『鉢ヶ崎』バス停、徒歩3分
- 金沢発北鉄特急バス『珠洲鉢ヶ崎』バス停すぐ

珠洲市立珠洲焼資料館 SUZU WARE MUSEUM





第1展示室

5つの展示棚(コーナー)をつかって、珠洲焼をダイジェストにご覧いただきます。

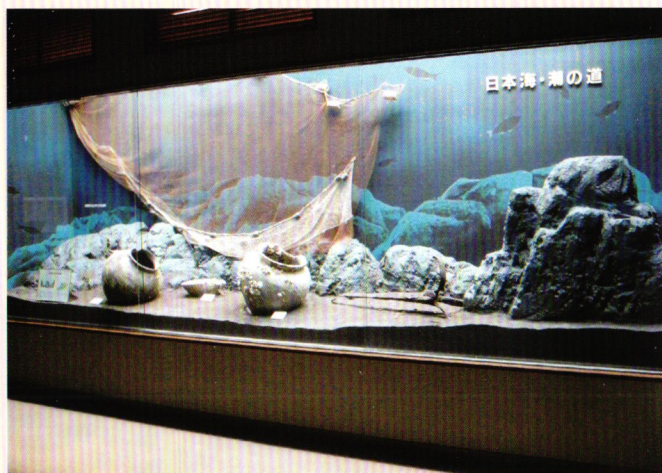
1. 装飾壺
2. 須恵器と初期珠洲焼
3. 耳付壺
4. 年代別窯跡出土陶片
5. 海揚げりと文字資料



壺



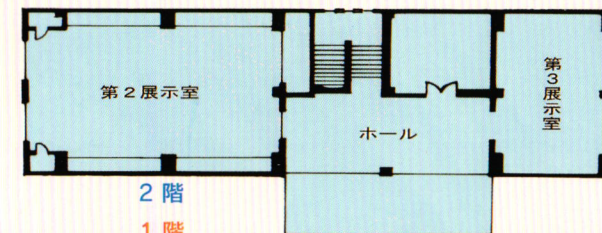
甕



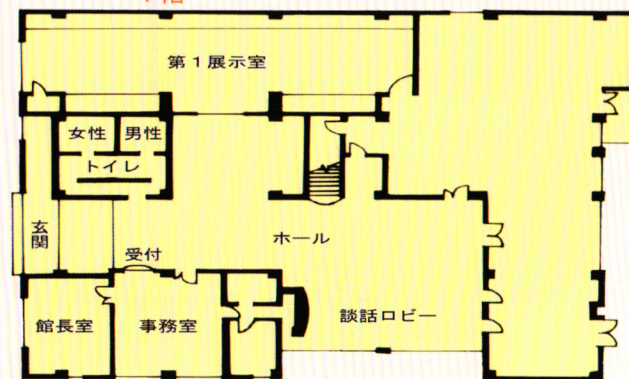
第2展示室

「海に沈んだ珠洲焼」

輸送途中に難破して、多くの珠洲焼が海底に眠っています。



2 階
1 階



「林」の文字が刻まれた
くしめ はじょうもんし じこ
櫛目波状文四耳壺



片口鉢とこね棒